



集落の話の聴き手だより

第13号

2024.10



今月は... 大門



- ・甲州街道が集落の中心の道路
旅人のために3つの宿がありました
- ・今も昔も、大門といえば権現山！
住人と深い関わりのある山です

語り手 小宮山 憲一
小宮山 勝輔
井出 正
畑 さなえ

佐久穂町役場から国道141号を小海方面へ向かい、中畑の信号を過ぎてすぐの交差点を斜め右へ。その先にある八千穂保育園や社協こまどり支所のほど近くに位置するのが、大門です。畑八村時代には役場もあり、村の中心でもありました。

集落の裏手には、権現山がそびえています。自然豊かな山は、集落の生活に密接に関わっていたようです。

沢山あった子どもの“仕事”と遊び

「昔の子どもはなんしろ、うちを助けるっていうのが当たり前で。」

子どもだった頃は、学校から帰ってくれば夜まで家の仕事をするのが当然だったと、最年長の憲一さんが話し始めます。他のみなさんも、そうだったね、と賛同しながら、子ども時代にした様々な仕事について教えてくださいました。

例えば、焚きつけのための松葉集めや“ぼや（薪）”取り。権現山まで松葉とぼやを取りに行ったそうです。家で飼っていたウサギやヤギのエサにするために、草刈りもしました。しかし、集落のほとんどの家で家畜を飼っていたので、近くの草は既に取りつくされていることもしばしば。遠くまで行くことも珍しくなかったようです。

様々な子どもの仕事の中で、特に印象に残っているのは、“おこあげ（蚕が繭を作るための部屋に移動させること）”だという声も上がりました。年に4回ほど出荷していた繭は、農家の大切な収入源でした。それぞれの家で飼っていた蚕が、繭を作り出す時期になると一斉に透明になってきます。すると近所の子どもたちにも、貴重な労働力として声がかかります。

「しきて（透明になって）くると、みんなで蚕拾ってまぶし（繭を作る部屋）へ入れていくの。その時期になると、もう桑を食べなくなり、頭を持ち上げて振ってくるの。」と、さなえさん。

「夏休み、おこあげの手伝いに行くとおむすびが出るで、子どもはそれを食べて。『おい、あそこのうちがあがる（おこあげをする）らしいや。』って（みんなで向かった）。その家のもんも（来るのが）分かっている、もうおむすびができていて。食べ行ったよ、何回も。」と、正さんも笑います。お手伝いの報酬でもらえるおむすびが、子どもたちの楽しみだったようです。



子どもの頃のお話をされるみなさん

そんな仕事の合間に、楽しい時間もありました。千曲川にも近い大門では、夏休みになると魚を捕まえに行きます。捕まえたカジカやハヤ（ウグイ）は、唐揚げや囲炉裏で焼いて食べたそうです。台風などで雨が沢山降った後には、田んぼからフナが逃げるので、それをすくうこともありました。U字溝になった今では、見られない景色です。

冬になると、山から取った桜の木でソリを作り、権現山から集落へ続く坂道を滑りました。色々な樹種の中でも、桜の木がよく滑ると先輩から教えてもらったそうです。子ども同士で教え合って遊んでいたんですね。

もう一つ、“せつつ（ホオジロ）罾”という面白い遊びも教えてもらいました。当時は、木材を馬で運ぶ仕事をしていた家が大門にも何軒もあり、馬が身近な存在でした。その馬の尻尾の毛を使って作る、小さな鳥を捕まえる罾なのだそう。藁をおいて鳥をおびき寄せては捕まえます。スズメは焼いて食べたら美味しいのだとも、教えてくださいました。



子どもの頃、ソリすべりをした坂道。
当時は、一度雪が降るとなかなか溶けずに残っていました。

権現山にある3つの神社と 賑やかだったお祭り

今も八千穂保育園の定番お散歩コースの権現山は、大門と隣の佐口の集落にまたがっています。そんな権現山には、ふもと、中腹、尾根に神社が3社あります。

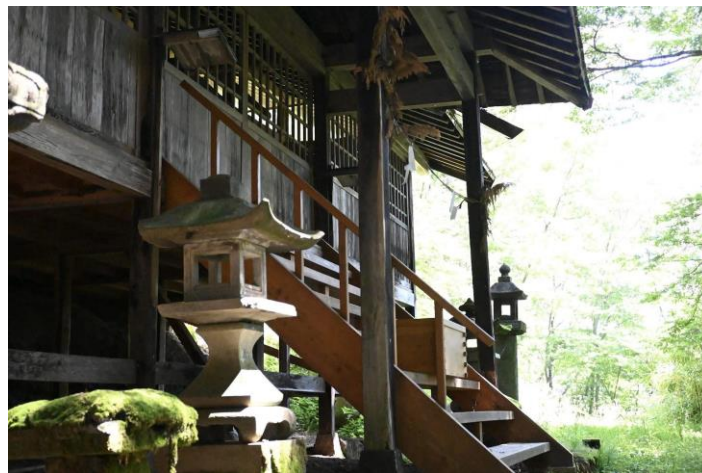
まず、集落の中の大きな鳥居をすぎて、山のふもとにあるのが護国神社です。戦争で亡くなった方を祀っていて、今でも遺族会が4月29日に供養をされています。

2つ目は、山の中腹にある諏訪神社。樹齢1000年以上といわれる神代杉がそびえ立っています。「上畑区の常会から2人ずつ出て（氏子を）やったの。上畑は、7つ常会があるんだよ。高根、大門、上畑第一、上畑中央と、清水町が1から3まで。」計14名の氏子が中心となり秋と春にお祭りをを行うのだと、氏子の経験のある正さんが詳しく話してくださいました。

鳥居から諏訪神社まで、集落の各家に1つずつと神社の参道にも提灯を飾っていた時期もありました。「夜になれば、その明かりがとてもきれいに集落を照らしていた。」と正さん。青年団が運営に関わっていたそうです。

そして3つ目は、尾根にある稲荷神社です。白田の稲荷山から分神された蚕（商売）の神様です。今でも、八千穂保育園の子どもたちは稲荷神社まで登ってきて、お社や東屋の周りで遊んでいます。

後日、それぞれの神社を参拝してきました。修繕されていたり、注連縄があったり、地域のみなさんが大切にしていることが伝わってきました。尾根の稲荷神社からは、千曲川から東側の集落を見渡すことができます。保育園から子どもたちのにぎやかな声も聞こえ、まるでここにいる神様がこの地域を見守っているように感じました。



神々しさを感じる諏訪神社。
数年前、寄付により修繕が行われました。

スポーツを通じて強くなる絆

神社の秋祭りの頃には村内一周駅伝も開催され、とても盛り上がっていたというお話も聞くことができました。福祉センターをスタートに、上畑、下畑、大久保、佐口、うそのくち、松井、八郡、大石、天神町と走る駅伝です。選手の経験がある憲一さんは、「俺はうそのくちから八郡まで走った。3、4キロあると思うだよ。」と、話してくださいました。駅伝のコースは、坂道ばかり。そんな厳しい道を走っていたなんて、驚きです。



憲一さんが参加された村内一周駅伝の様子。
大門は上畑チームとして参加しました。

スポーツが盛んだった大門。村民運動会ではお隣の高根と合同で大高分館として参加し、優勝回数は最多で、連覇したこともあるのが自慢です。「村民運動会は、年齢や性別に関わらずみんなが参加できて楽しめたのよ。」と話すのは、さなえさん。

正さんも、「我々が若い時はスポーツ（早起き野球やソフトボール）に慣れ親しんだけど。家族やみんながまとまって参加できて、（集落が）盛り上がったんだよ。」と、当時を懐かしみます。

正さんや勝輔さんは、最近まで毎年同級生で集まっていたといいます。一緒に旅行に行ったり、ご飯を食べたり、楽しそうな写真も見せてくださいました。

「地域の輪だ。（運動会などスポーツを通じて共に活動をしていたので）そういうことでまとまりがよかった。」と勝輔さん。若い頃から地域に積極的に携わっていたみなさんは、今でも地域のサロンや活動へ多く参加されるそうです。

この集落で育ち、絆を強めていったみなさんの空気感は、終始和やかなものでした。これからもこのつながりが、下の世代へとつながっていくことを願っているんだ、と最後に話してくださいました。



畑八村での村民運動会での仮装の様子。
八千穂北小中学校のグラウンドで行われていました。

聴き手	川嶋 愛香
	櫻井 麻美
	山崎 藍子
文章	川嶋 愛香
編集	櫻井 麻美
デザイン	西澤 ユキ



海瀬新田 と人の暮らし



佐久穂小・中学校の南側にある集落が海瀬新田である。歴史は古く、17世紀までさかのぼる。久留間百合子さんにその集落を歩いて案内してもらう。県道をしばらく歩くと、歴史を感じさせる建造物を見つける。「これは御制札と呼ばれ、江戸時代から明治初期まで使われてました。法令や通知を掲示したようです。脇にある石祠も江戸時代に建立されたものらしいです。」千曲川沿いの道には畑が続く。「このあたりにホテルが戻ってきたので、夏の楽しみが増えました。」と、百合子さんは言う。



御制札と石祠

島崎徹夫さんは、生まれも育ちも海瀬新田。一度も外に出たことがない。初めて徹夫さんに会ったのは、月一回公民館で行われる健康マージャンの時である。「若い時は、友達3人いたので、毎晩麻雀をやったものです。それしか楽しみがなかった。冬場なんか外に出ると、雪が降ってるので、朝までやらずいと言って夜通しやったこともあります。今はそうゆう遊びもなくなりました。『昭和は遠くになりにけり』です。」

徹夫さんは家が学校に近かったせいで、寄り道もせず家に帰って来たそうです。「子どもの遊びで覚えてるのは、本家の下屋の下でビー玉やパッチンをしたことぐらい。あとはどんど焼きのことかな。大人たちがカラ松の太い木を切り出してやぐらを組み、子どもたちはリヤカーを引きながら各家の前に出ている松飾を集めて回りました。どんど焼きの残り火でお餅を焼いて食べると、

その年は一年中風邪をひかないと言われたことを覚えます。夏はアイスクャンディー屋が自転車で売りに来たので、お袋がよく買ってくれました。自転車といえば、納豆屋のおばちゃんが『ナットー、ナットー』と掛け声をかけながら売りに来てました。親父が左官屋だったので、お袋が水田と蚕の世話をしていた。手伝いをした記憶が無いのは、一人っ子で大事にされてたのかもしれない。」

徹夫さんは、月一回の健康マージャンをやり公民館に来るのが楽しみだという。長生きの秘訣は、『憎まれっ子世に憚る』だなとニコニコしながら答えてくれた。



島崎徹夫さん

嶋崎昭彦さんは、教職の仕事を千葉県でスタートさせ、35歳の時、地元に戻り定年退職まで勤めた。

「小学生の頃は、近所には20人くらい子どもがいて、公民館前の庭で鬼ごっこしたり、三角ベース野球をしてました。その頃は、千曲川東側は堤防が無く、川幅は広かったです。その河川敷は砂地で、みんなで川遊びをよくしてました。千曲川の水は綺麗で飲める程でした。その後堤防ができたので、大規模な区画整理をして田んぼにしたのを覚えています。田んぼにするために、掘り返すと大きな石が出てくる。大人たちは石の周囲を掘り起こし、全体が出てくると石屋が来てその大きな石をきれいに割るんです。その手際の良さびっくりしました。」

「新田は、小学校が近かったので、寄り道した覚えはありません。ただ、友達と山に行って、ターザンごっこをしてました。テレビの影響だと思います。夕方になればテレビを見に集まってました。家は農家だったので、米、菊、リンゴ栽培とその手伝いばかりしてました。」と、昭彦さんは当時の思い出を語ってくれました。

中学の教員をしていた昭彦さんは千葉県から長野県に戻って最初の赴任地が依田窪（長和町、旧武石村）でしたが、すぐに地元に戻り、教員を続けた。「私たちも忙しかったが、なぜか心に余裕がありました。だから教員を続けられたと思います。それに学校と地域が生活を土台にして結びついていました。お田植え休みや稲刈り休みがあった時代です。子どもが家の手伝いをするのが当たり前で、学校にも協力的だった。」

新田はまとまりが強い集落だと聞いていたので、このことを昭彦さんに尋ねると、「年齢の近い子どもたちが20人もいれば、大人になっても何かあれば集まってくれます。うちのおばやん（昭彦さんの母親のこと）たちはよくお茶会をやったり、みんなで大正琴を習ったりしてました。時代が変わっても集まり事は継続していこうと思っている人が多いのは確かです。『健康マージャン』もそうですが、8月4日の日曜日に『ビール祭り』をやりました。去年から始めたのですが、今年は40人くらいが集まりました。特に子どもたちが大勢来てくれたのが良かった。この後、『リース編み』と『しめ縄づくり』も予定されてます。子どもの数が増えて15人いますので、活気があります。まとまりの強さを生かした様々な活動ができればいいなと思ってます。」と、昭彦さんは楽しそうに語ってくれた。

嶋崎敏彦さんは海瀬新田の分館長です。「昔は近所付き合いがあるのが当たり前でした。それを復活させたいという気持ちを持っていたので、気軽に集まれる場所を作ろうと思ってました。手を動かし、頭を使う麻雀がいかんと思った時、町の広報誌で、プロの麻雀士が佐久市に住んでいることを知り、今年の1月から3回指導してもらいました。初心者が10人も集まったので、4月から第三日曜日、午前10時から12時までの2時間限定の健康マージャンがスタートしました。」

海瀬新田では、ビール祭りが再開されたそうです。コロナ前にビール祭りを開催して、好評だったことから、昨年再開したところ、50名（大人、子どもを含む）ほどが集まったそうです。敏彦さん曰く、「新田は34軒の小さな集落で、まとまりやすい規模だからできたと思います。」

「子どもの頃の話をする、新田には1年生から6年生まで25、6人いました。私は同級生はいませんでした。一つ上や一つ下に5、6人いましたし、高学年の子どもは面倒見が良かったので、よく遊んでもらいました。公民館の狭い庭で三角ベース野球や陣地取りをして遊んだもんです。家の中で遊んだことはなかったと思います。昔は季節保育園というのがありました。春のお田植え休みと秋の稲刈り休みの時だけ、中央小学校の体育館に年少、年中、年長の保育園児がぞろぞろ連れ立って行くんです。そんな環境で育ったせいか、子ども同士の繋がりは強かったです。」

現在、敏彦さんは果樹園を営んでいる。退職後に始めて9年目だと言います。40アールのリンゴ園と20アールのブルーベリー園を所有している。両親が田んぼとリンゴ園をやっていたので、子どもの頃から農業を手伝っていたそうです。「農業は継ぐもんだという意識を持ち続けたから、今の自分があるのだ。」と、敏彦さんが話してくれた。



ブルーベリー園に立つ嶋崎敏彦さん

土佐谷享さんは、静岡県出身。2015年、海瀬新田に移住してきた。農業協同組合の職員として13年間勤務した後、有機農業者として独立。現在、トマトをビニールハウス4棟使い栽培している。生食用として主に出荷し、形の悪いものをジュース加工している。県の新規就農里親研修制度を利用し、2013年から2年間は川久保に住み農業研修員として熟練の有機農家から栽培を学んだそうだ。

佐久穂町で農業を始めたきっかけは、大学農学部同期が下海瀬で有機トマト栽培をしていたことと農業をやりたいという強い思いがあったと言う。

「私たち夫婦はラッキーでした。農地だけでなく住む家も町の農協さんの紹介ですぐに見つけることができました。海瀬新田の皆様には親切にいただき、快く受け入れてもらえたので、地域に溶け込む不安はありませんでした。それに隣家に住む同年代の人から消防団に誘われて入りました。消防団には同年代で異業種の人たちがいたので、いろいろな話を聞くことができましたし、地域の結びつきの強さを実感しました。好奇心は持っている方だと自分でも思っているの、道普請に出役した時に、周りの方々から聞く昔話は面白かったです。」

「トマト栽培は、1年中休むことはできません。好きで始めた仕事なので、苦にはなりません。私の個人的な思いですが、トマトが上手にできたときの喜びは何物にも代えられません。もちろん、良いことばかりではありません。毎年課題が見つかります。それをどう克服するかを考えて農業をしています。私たちの目指すところはあまり環境に負荷をかけないスモール農業です。環境負荷低減を実現するためにいろいろチャレンジしていくことは楽しい。好きなんです農業が。」と、語ってくれた。



有機トマト栽培をする土佐谷享さん



(文責 西村寛)

